成蹊會誌

第18号

目　次

成蹊会々長に就任して……青葉翰於（1）
会務報告・成蹊会役員一覧……（2）
学校と社会……成蹊学園総長　高瀬荘太郎（7）
成蹊学園創立50周年記念事業……成蹊学園記念事業総務委員会（9）
成蹊29年……特別会員　滑川道夫（11）
ごあいさつ……特別会員　西原慶一（15）
聖書と私……市島和夫（17）
第38回枯林忌と中村春二先生のお墓詣り……（18）
成蹊会報告……（19）
成蹊学園近況……（24）
会員消息……（28）
やよい会便り……（21）　支部便り……（22）
斯の道の会……（23）　会費申込者……（53）

1961－6

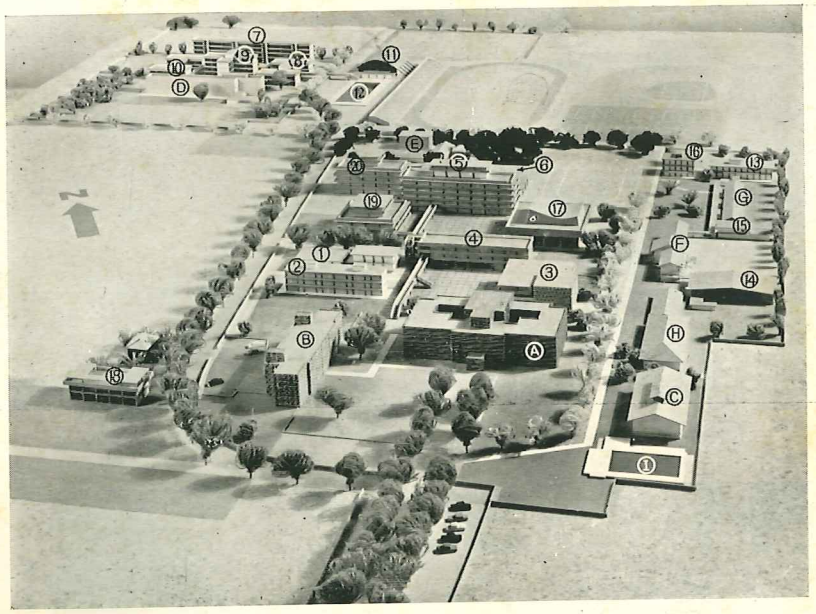
成蹊会々長に就任して

青葉翰於

桃李もの言わず、下自から蹊を成すとの古語からとって校名を成蹊と名付け、不言実行を信条として少数精鋭の理想教育に情熱を傾けられた若い教育者中村春二先生の御理想とそれを全面的に支援された岩崎小弥太、今村繁三両氏の温い友情によって成蹊学園が創立されてからもう五十年の歳月が流れた。この半世紀の間に第一次及び第二次と二度の世界大戦が戦われて日本の姿にも大きな変化があったが、成蹊学園は新しい情勢に適応しつつ建学の精神を失わずに発展をつづけている。洋の東西を問わず古い学校にはそれぞれ立派な伝統があり、殊に私立学校に於ては創立者の建学の精神を維持発展させることが学校の特色を生かす所以であると思う。

創始者中村春二先生は教育に対する真剣な御努力から健康を害され四十八才の若さで逝去されたのであるが、御自分の命を犠牲にしてまでも立派な教育を実現しようと云う先生の大きな愛情が今日の成蹊学園を育ててきた源流となっているのである。その後成蹊の教育を担当して下さった多数の諸先生も中村先生の御精神を受けつがれ学生の指導に当られてきたものと信じている。卒業生は学校に生みおとされた子供のようなものであるから、卒業生と学校の関係は親子の縁と同様切っても切れないのである。子が親を愛敬するのは自然の情であり、卒業生が母校を愛すると共にその師の恩に報ゆる気持は人間として当然の道であると思う。「利害を超越した謝恩の集いほど美わしいものはない」私は同窓会として成蹊会の一番大切な仕事は恩師に対する謝恩にあると考えているのであって、そのふんい気のうちにおのずから成蹊建学の精神も維持昂揚され同窓生間の親睦も実現されるのである。そこにまた現在の学校と卒業生の気持の一体化も図られることになろう。

次に学園創立五十周年記念事業が計画されているが、これに対する協力は卒業生として学校の恩に報ゆる当面の具体的問題であるから、申上げるまでもないことであるが、会員各位の格別の御奮発を御願い致したい。成蹊会も歴代の会長はじめ各役員及び会員の方々の御熱心な御尽力によって次第に内容が充実し、本部ならびに地方支部の活動も益々活発となり会員の親睦の実が上っていることは御同慶の至りである。このように立派に育ってきた成蹊会に今回はからずも会長に選ばれた私として何もつけ加えることはないが、一言所感をのべて御挨拶とする次第ある。（実八・富士銀行取締役）



成蹊学園総合建築計画案

○大　学

政経学部	A…本　館	3　階
	1…1号館	1～2〃
	2…2号館	3　〃
	3…図書館	3　〃
	4…研究室	3　〃
工学部	5…研究室，講義室，製図室	5　〃
	6…実験室	2　〃
	B…教養課程	3　〃
	19…増築（将来計画）	3　〃
	20…増築（将来計画）	4　〃
共　用	18…学生ホール	2　〃
	C…体育館	1　〃

○中・高等学校

D…中学普通教室	3　〃
7…高校普通教室	4　〃
8…本　部	2　〃
9…特別教室（理科）	4　階
10…特別教室（工作，芸能）	2　〃
11…体育館	1～2〃
12…50Mプール	
E…図書館	1　〃

○小　学　校

13…理科館	2　〃
14…体育館	1～2〃
15…職員室，普通教室	2　〃
16…特別教室（図工，音楽）	3　〃
F…普通教室	2　〃
G…普通教室	1　〃
H…給食室	1　〃
I…25Mプール	

○学　園

17…学園講堂	1～2〃

注：アルファベット……既存建物
　　数字……計画建物

にはゆかない。もしも社会の革新的要請を偏重して、社会の秩序と安定に必要な現在社会の要請が無視されたならば、学校は社会を不安、動揺、混乱に陥れる煽動機関と化し、建設なき革新すなわち破壊的革新を推進して、社会の革新的要請の達成にも反する結果となるであろう。社会の安定的要請と革新的要請という一見矛盾するようにみえる二つの要請に対して同時に応えなくてはならぬところに学校として甚だ困難な問題がある。しかし、それがいかに難かしくとも、この対立、矛盾を克服して、安定的革新という社会の建設的進歩の要請に応え得るような理想的社会人の養成こそ、わが成蹊学園の目ざすところでなければならない。

成蹊学園五十年の歴史も、このような理想的社会人の構想と、その育成に不断の努力を傾けてきた歴史であったといってよいであろう。成蹊学園建学の精神が道義的社会人および実践的社会人の構想に重点をおいたことは、社会の安定的要請と革新的要請とに応えるために必要な二つの中心的構想であったとみることができる。またかかる二つの中心的構想の実現について最も重要視された厳しい鍛錬主義と自由活達な個性尊重主義とは、一見矛盾するようにみえる二つの要請に応える社会人形成の成蹊的手法であったといえるであろう。

成蹊学園が、さきに政治経済学部を創設して大学教育の分野に進出したことも、かかる社会的要請に十分応えるためには、高等普通教育の段階にとどまらず、社会人養成の最終段階である大学教育への前進が必要欠くべからざるものと考えられた結果にほかならない。すなわち政治および経済は社会生活の基本的構造であるから、先ずこの分野で活動する社会人の養成を最大の急務と考えたためである。社会人養成の一般的見地からいえば、政治経済学部のみにとどまらず、更に広く、社会科学系および人文科学系諸学部の増設も当然に要望されるところであるが、技術的社会人の養成を目的とする工学部の設置がなお一層緊急視されなければならぬ情勢になってきた。いわゆる技術革新の時代を迎えて、技術的社会人に対する社会の要請が急速に増大する機運に当面して、これを無視することは、社会的使命達成を最高の念願とする成蹊学園建学の精神にも反する結果となるであろう。

今回学園五十周年を記念して工学部設置の計画を推進することとなったのもかかる時代の要請に応えて、学園建学の精神を十分に発揚したいという意図に基づくものにほかならない。もとより技術的社会人養成の見地からいって、単に工学部設置のみでは甚だ不十分に違いないが、工学部が技術的社会人養成の中核であることは、政治経済学部が技術系以外の一般社会人養成の中核であることと等しいところからみて、これが今日の社会的要請に応える最大の急務であるといってよいであろう。

しかし、工学部設置は資金面からいっても、また教授陣容整備の面からいっても最も難事であることは何人にも推測されるところであって、これがためには学園当局の異常な決意と渾身の努力を要することは勿論、卒業生その他各方面の強力な援助と協力に俟たなければ到底計画の達成は困難である。ついては成蹊会各位におかれても、母校発展のため、また母校の社会的使命達成のため、これに全面的御支援と御協力を賜るよう懇願する次第である。

成蹊学園創立五十周年記念事業

――工学部設置と学園総合建築計画――

成蹊学園　記念事業総務委員会

明治三十九年（一九〇六年）中村春二先生によって創設された成蹊学園は、来る昭和三十七年をもって創立五十周年を迎える。明治大正・昭和の三代にわたって、成蹊学園がわが国の教育界に常に独自の地歩を占め、よく私学成蹊としての使命を果してきた。殊に成蹊教育の中核とした「個性を尊重する人間教育」は戦後の新教育体制下においても、いささかも変るところなき誇るべき伝統である。小学校から大学にいたる一貫教育は、この宇宙時代を迎えて、総合大学としての工学部の開設を要請され、ここに成蹊学園は後記のような一大飛躍の大計を決意することとなった。

政治経済学部の充実、工学部の開設、教育環境の整備、下級各校の定員増加など、これらの諸条件が今次の五十周年記念事業の主要なる基盤であり、また目標である。それには先ず校舎の大量新築を必要とし、そのための多大の資金がまた必要となる。

昨年春、高瀬荘太郎博士を学園の新総長に迎えるにあたり、以上の学園発展の事業計画が急速に具体化することになった。即ち石黒理事長を中心として工学部設置と学園総合建築計画とが小委員会で数回検討された。一方、学園北西部に隣接する旧木村邸跡を学園へ購入する交渉も開始された。

かくして昨年九月十二日の第三十二回理事会において、全会一致をもって工学部設置と総合建築計画とが決定した。引き続き募金運動の方法とその活動組織の具体化を学内当局者との間で協議し、十二月二十日の理事会で記念事業委員会の構成が検討され、総合建築と募金運動が進められることとなった。工学部設置については十二月七日工業クラブにおいて第一回の設置委員打合せが開かれ工学部首脳スタッフの人選交渉が進められている。

学内においては総務委員会が学内当局者の間で結成され、その下に総合建築委員会が各校のスタッフから任命された。それとともに募金事務を始め建築に関してもいろいろ事務が多いので、学園の常時事務組織の外に、記念事業遂行のための常務局を設置（本館二階総長室東隣二〇九号室）に専任事務員をおいて活動を開始した。

総合建築については同窓生である東京大学工学部建築学教室の吉武教授の指導のもとに設計が進められている。昨年末には都内各大学の新設図書館や工学部の施設を巡回見学し、また高校のホームルームその他の新施設には関西方面の諸学校を視察したりして、新資

料の調査も行なわれ目下、本館裏の二階設計事務室で最後の設計が行なわれている。

小学校の校舎二教室の増築は既に十二月着工し、三月末までに完成の予定である。

工学部新館が裏の四〇〇メートルトラック内西寄りに建設予定されているが、このトラックは昨年春約五〇〇万円をかけて改装したばかりで、学生一般から惜しまれている。しかし総合運動場の中央へ、このまま移転が容易であるので資材はそのまま利用されるし、体育館や五〇メートルプールと隣接するとすれば百年の大計としてやむを得ないと見られている。三月に入ると校地北西部の中学北側の旧寮二棟と家庭科教室の移転が開始され、中高ブロックの建築が着工する。

新教育制度の実施以後、成蹊学園発展のあとを顧みると、その組織、施設、学生生徒数および教育環境などは年をおって著しく増強されたが、他面、まだ解決を要するものがいくつか残されている。

第一、教育組織についていえば、本学園は少数教育をたてまえとする小学校と七年制高校との二つの学校であったが、施設、職員組織などはるかに公立に優れていた。新教育制度により六―三制の義務教育年限は、私学成蹊の伝統を社会に再認識させ、本学園に対する社会的支持は急速に高まった。そのため男女共学制による小中高校への編成替えと学級の増加が要請されたのみならず、ひいて成蹊大学の開設をうながし、六―三―三―四制の四制の四校による学園一貫教育の体制が確立され、当時の青空教室の多い公立教育機関に対し著しい対照をなした。

第二に、戦後約十五年にわたる小中高大の一貫教育体制の拡張にともない、本学園の学生生徒の収容数は、必然的に増加し学級数も漸次増加されて、現在三六〇〇余名（内女子五〇〇名）をかぞえるに至った。

これは戦前の八〇〇余名に対し約四・五倍である。このため施設の増強が学生生徒数の増加にともなわず「個性尊重」の教育に支障を生ずることになっている。殊に大学文科系の政治経済学部のみで総合大学としての理科系の学部をもたないので、下級校からの進学者の希望に応ぜられないうらみがある。これは今次の工学部開設計画によってようやく満たされることとなった。

第三に、校舎の施設と設備については、まず小学校木造校舎の再建を行った。次いで学生生徒の増加につれて、年々新しく幾棟かの近代的校舎を増築した。そのため旧施設の延五一四五坪に加え、新施設は延三一二四坪となり、約六〇％の増強を行なうことができ、その他の附属施設を含めて約一万坪余となったが、前述の通り、学生生徒数に対し、その拡張を要することとなり、高校の新築移転が決定したのである。

第四には、本学園の教育環境についてである。新教育制度の実施に当って、先ず中学校々舎（八二八坪）を校地の西北部に新築分離し、小学校も本館から原位置の復興校舎に移転した。これと同時に図書館は小中高校とも、それぞれ開架式小図書館を校舎内に設備し、中央図書館は大学図書館専用となった。しかしこれも今や九万冊の蔵書を収容しきれない。一三〇〇名の学生をもつ大学の政治経済学部は旧制高校の施設を利用しながら新制高校とは理科館と体育館を共用しなければならぬ不便があり、工学部の新設、専用体育館の建設が要望されている。数年前より、大学一号館（二四五坪）、同二

号館（四三一坪）の増築が引続き行われた。しかしまだ、例えば第一学生ホール食堂等の共用をまぬがれず、生活指導上にもなお日常幾多の困難さを残している。

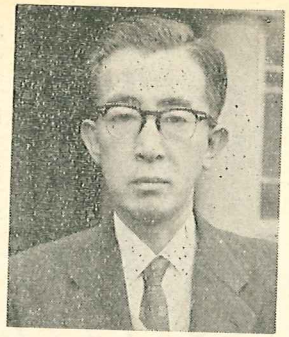
以上のように教育環境を整備したが、また他面年来の懸案であった中学高校を統一した教育課程の上に、一貫教育にふさわしい教育を行うために、高等学校を中学校と隣接した校地に移転し、中高六年制の教育体制を確立する方針がいよいよ今次の計画により実現されることとなった。従って体育施設は、この大方針と関連して校地の北半に総合運動場を設定し、体育館五〇メートルプールを始め各校の運動施設はここを中心に再配置することとなった。全学園の教育環境は今次の記念事業計画の進捗につれて、別図に見られる通り四つの大きなブロックに分れる。すなわち校地南部の本館を中心とする大学ブロック、それに隣る桜並木東側に小学校ブロック、北半に総合運動場、西北部に中高ブロックを設定するのであって、それらの境にはそれぞれ緑の並木があり、旧来の武蔵野の風致を残す「森の学園」が成立することになった。

今次記念事業の総合建築計画は大図書館（一〇〇〇坪）と研究室（七〇〇坪）に既設の本館（一七〇〇坪）の北側に、その北方旧グラウンドの西寄りに工学部新館（一〇〇〇坪）が建築され、旧図書館跡には大講堂（七〇〇坪）が予定されている。他方校地西北部の中高ブロックには現在の中学校舎の北側に高校のホームルーム（八〇〇坪）と中高本部並びに共用特別教室（一五〇〇坪）が新築される。

以上の総合建築計画は本学園としては百年の大計をめざす画期的な事業であるけれども、四つの学校を一貫する総合的教育機関として、それぞれに活用することができ、本学園の伝統的教育精神―質実剛健、実践教育、個性尊重、人物育成―を徹底することは容易となる。これこそ創立者の意図を生かし、現在の国家的社会的要望にこたえるにふさわしい五十周年記念事業である。

成蹊二十九年（その一）

特別会員　滑川道夫



（1）ラスト・シーン

いよいよ成蹊を去るというぎりぎりの三月三十一日に、わたしは学園の各校各所に退職のあいさつをして廻った。各校の職員室はどこもがらんとしていた。ちょうど学年末の休暇であったから。

そこに居合わせた方にあいさつを述べ、かねて用意していた書簡